



逆し獣姦魔法少女イリヤちゃんⅡ

触手姦・犬姦・豚姦・挑発しん・逆しん・産卵

DOJIN
R18
成人向け

女騎士の城

触手姦・犬姦・豚姦・挑発レイプ・逆レイプ・産卵



見た目の醜悪さに反比例し、予想外に気持ちよく、触手が私の子宮をかき回すたび、私は悲鳴を上げました。私の全身にはねつとりと生臭い粘液が塗りつけられ、それが皮膚から浸み込んで体をさらに発情させます。そして、触手が私の子宮に射精したその時でした。精液に、私の魔力が吸い取られ始めたのです。

「イリヤ」「ひっ……やめっ!？」

「んんんあああつ♡♡」

触手は魔力を得た事でさらに活発になり、私の子宮を蹂躪し、快楽を叩きこんで来ます。私の体から魔力が失われていくと同時に、何度も繰り返し絶頂し、体を震わせました。



「イリヤ」「はあっ…♡はあっ…♡」

それから1時間ほど、私は触手にたつぷり犯され、触手は用が済んだとばかりに魔界へ帰りました。しかし子宮には、まだ大量の精液が残っており、その精液が私の魔力を吸い取り続けています。おそらく、成長のために使っているのでしょう。

「イリヤ」「まさこんな事になるなんて…♡」

私に出来る事は、失われる以上に魔力を補給し、触手の子を育てて産み落とす事だけです。私は城の外で、新たな相手を探し始めました。



【野良犬】
「イリヤ」

「ウウウツツツ！ワンツ！ワンツ！
「ひっ！きゃあああああつっ！」

私が外に出てすぐ、盛りの付いた
野良犬が襲い掛かって来ました。
私には触手の体液が付いたままです。
きつとその匂いで発情したのでしょう。

【野良犬】
「イリヤ」

「ハッ！ハッ！
「んっ！ああっ♡」

私が両足を開くと、野良犬は躊躇なく
勃起したペニスを私の割れ目にねじ込みます。
触手の体液によつて発情し、敏感になった体は、
無意識にペニスを締め付け、声を上げました。



【野良犬】
「イリヤ」

「グルウウウツツッ!」
「ひぐっ♡♡♡ひあああつつ♡♡♡」

野良犬はその先端を子宮に潜り込ませ、
私の最深部に直接射精を始めました。
人間とは比較にならない大量の精液に、
私の子宮はすぐに絶頂を迎えます。

【野良犬】
「イリヤ」

「ウウウツツッ…」
「あっ♡♡あっ♡♡」

元々、子宮に射精されるのが大好きなのですが、
触手の精液で子宮内部が敏感になっているためか、
いつもより強い快楽で、頭が真っ白になります。
私は絶頂し、野良犬の精液を絞りつくしました。



「イリヤ」『ラフツ♥じゃあ次は君だね♥』
「豚」『プギツッ! プギイイツッ!』

私は城から少し離れた場所にある養豚場へと移動し、そこで飼われている家畜の豚の所へと向かいました。豚は私を見るなり鼻息を荒くし、ペニスを勃起させます。私は膝を付き彼らに背を向けると、そのうちの1匹が私にのしかかり、細長いペニスをねじ込んで来ました。

「イリヤ」『んっ♥ ああああつつ♥♥♥』

太さでは物足りませんが、いきなり子宮に入り込み、敏感になつていゝ場所を突き刺すように蹂躪します。これ、めちやくちや気持ち良すぎる。私はその細いペニスを締め付け、腰を振り、その異形の快楽を堪能しました。



「豚」ラギッ！プギイイツツツツ！
「イリヤ」「ひぐっ♡ああああっ♡♡♡」

豚は数回ほどピストンした所で射精しました。
突き上げが少なく呆気なさを感じていましたが、
すぐにその考えは間違いだった事に気づかされます。
豚の射精が一向に止まる気配が無いのです。

「イリヤ」「うそっ…♡いっぱい出てっ…
ひあああつつつつ♡♡♡」

すぐに子宮内部は精液でいっぱいになり、
逃げ場を失った精液が卵管へと流れ込み、
膣の隙間から勢いよく噴き出して行きます。
私は何度も絶頂で体を痙攣させながら、
その精液をすべて子宮で受け止めました。



その後、夜が明けるまで豚達と交尾を続けました。
しかし朝になれば人がやってくるかもしれない。
私は城へと帰り汁まみれの体を綺麗にし、
夜まで休む事にしました。

ははは

ははは

ヒキキ

「イリヤ」

「はあっ…♡はあっ…♡」

結構魔力が溜まったかな…」

夜まで寝ている間に、子宮内の様子に変化しました。
子宮に出された精液は、触手の子種によって分解され、
魔力となつて触手の子種へと吸収されていったようです。
粘度の高い液状だった触手の子種は、少し固まってきたのが、
粒々とした形状の物体が、子宮内で脈動している感触が伝わってきます。
そしてそれは、より多くの精液を、魔力を集めてくるよう、さらに私を発情させます。
私は次なる獲物を求めて、魔力探知を行い、魔力量の高いオスを探しました。



「イリヤ」 「お兄さんたち、こんばんはっ♡」

私が近くの海岸へと向かうと、そこには不良グループがたむろしていました。彼らは私を見て訝しんだ後、じろじろと私の顔と体を凝視し始めました。

「不良」 「なんだこのガキ？水泳の練習なら昼にやれよ。今は大人の時間だ」

「不良」 「ん？よく見ると乳首と割れ目が透けてるじゃねえか？」

「不良」 「ガキのくせに、妙にエロいなコイツ…」

ははは

ヒキキ

ははは

「不良」 「こんな時間にそんな恰好で外に出て、

悪い大人にレイプされても知らねえぞ？」

「イリヤ」 「クスクス…レイプですか？」

私もう何度もレイプされてるから、今更気にしませんよ♡」

私が挑発的な笑みと目線を向けながらそう言うと、不良は舌なめずりをしました。そしてそのまま不良は私を取り囲み、私を砂浜へと押し倒したのです。



ザッ

ザッ

「へへっ、そういう事かよ…変態のクソガキがよ。」

「イリヤ」

「ひっ……!! ああああっっ♡♡♡」

不良は私の後ろから、バックでペニスを突っ込んで来ました。触手の体液がしみこんだ肌から発するフェロモンの影響か、不良は目を血走らせながら、腰を突き上げて来ます。ペニスが子宮にねじ込まれると、強い快楽と魔力がペニスを通して体に浸み込んで来る感触が伝わります。ただの人間のクセに思ったより気持ちよくて、私は思わず声を漏らしてしまいます。



「不良」

「うぐっ…こいつガキの癖になんてマシヨだった…
が、我慢できねえっ…！中に出すぞっ！」

「イリヤ」

「あっ…！んおおおおおつつっ♡♡♡♡」

不良は私のオマシコに我慢しきれず、中に射精しました。
精液が子宮に染み込むと、今までの相手とは比較にならない、
大量の魔力が注ぎ込まれている事が理解できます。
触手の精液もその魔力を受け、粒状の塊が小刻みに震え、
私の子宮に特異な感覚を与えて、絶頂へと導きます。
私は絶頂に震え、艶めかしい声を上げながら、
膣を痛いほどに締め付けて、不良の精液と魔力を
根こそぎ絞りつくしていきました。



不良達は私を一通り輪姦した後、すつきりした顔をして、その場を立ち去ろうとしましたが、そんな都合の良い事を、発情している今の私が許すはずありません。私は魔術を使って彼らの行動の自由を奪い取った後、パニーガール姿に着替える事で彼らをさらに興奮させ、より多くの精液と魔力を搾り取るため、彼らを犯しました。

【不良】「ひっ……もう勘弁しつ……あああ……」
「イリヤ」「全く、この程度で情けないですね♡」

ほらほら、しっかりと勃起して下さいよっ♡」

最初のうちこそ余裕そうな顔をしていた不良達でしたが、3回目、4回目になると、苦悶の表情を浮かべ始めました。しかし、レイプ魔に遠慮する事はありません。私は何度も彼らの上で腰を振り、彼らを犯し続けました。



「不良」「も、もう限界っ……やめっ……しぬっ……」
「イリヤ」「仕方ない……次の射精で最後にしてあげます♡」

これ以上やるとテクノブレイクで死ぬかもしれせん。
私は不良のペニスを子宮内にまで加えこみ、不良の尻穴を
愛撫して前立腺を刺激し、射精を促しました。

「不良」「ひっ！ぐああああっっ！」
「イリヤ」「あっ……♡いっぱい出てるっ♡♡♡」

不良は悲鳴を上げ気を失いながら射精しました。
私は痙攣する不良の体の上にまたがりながら、彼の濃厚な
精液と魔力を、最後の一絞りまで吸い尽くしました。
そうして全ての不良が気絶するまで搾り取った直後、
子宮の中の触手の子種が、激しく震え始めたのです。



死屍累々としている不良の隣で、私は足を広げます。
直後、子宮の中から粒状の何かが押し出され、膣を
通って私の体の外へと排出されていきました。

「イリヤ」 「あっ♡触手の卵がつ♡」

思ったよりも小さい卵が複数個、男達の精液とともに、
膣口からあふれ出し、小さい水たまりを作って行きます。
その卵は、私の魔力はもちろん、獣達や男達の魔力も
吸っており、それが子宮から膣へと通り抜けるだけで、
痺れるような刺激を与えられます。

「イリヤ」 「あっ…♡いくっ…♡」

その強い刺激に私は絶頂し、膣口をだらしなく広げ、
体を震わせて甘い声を漏らし続けていました。



「イリヤ」

「はあっ…♥はあっ…♥」

これで子種は全部産み落としたかなっ…♥」

私は何度も絶頂しながら、触手の卵をすべて産み落としました。
私は呼吸を整えて、死屍累々と横たわる不良を後目に立ち上がります。
私は大幅に回復した魔力を使って、男達に魔術を使用しました。
魔術を受けた男達は即座に自我を失い、まるでゾンビのように
ゆらりと立ち上がり、獣のようなうめき声を上げ始めました。

ヒキキ

はあはあ

「イリヤ」

「魔法少女である私としては、

貴方達のような変態レイプ魔を野放しにする事はできません
この私が責任を持って、精液タンクとして飼ってあげます♥」

魔術によって自我を奪われた不良は、私の命令に対してうなずいて反応します。
城に戻れば、彼らの精力を回復させる手段など、いくらでもあります。
私は城に戻ってからの楽しみを想像し、早くも興奮し始めていたのです。

- 発行 鎖の少女&女騎士の城
<http://knightmaster.kir.jp/>
- 責任者 ナイト
general@kagoya.net
- 作成 雪味あいりす&ナイト
- 日付 2023年08月13日
- 印刷 プリントプロ
※18歳未満の購読禁止
※無断転載禁止

































触手蟲・犬蟲・豚蟲・挑発レイン・逆レイン・産卵



18歳未満の
購入・閲覧禁止

「イリヤ」「んっ♡んむううっ♡♡」

私はイリヤスファイルフォン・アインツベルン。

魔法少女として活動しています。

私は魔力供給用精液タンクとして、人間の男達を、
廃墟と化した城にある地下牢に監禁しています。

しかし、いくら魔力供給のためとはいえ、

人間の男ばかりだと単調で少し飽きてしまいます。

そこで、とある魔導書を使って魔界の魔物を召喚し、

その魔物に私を犯させてみようと考えました。

現れた魔物は海魔の一種で、その触手を私の全身に絡ませ、

媚薬効果のある粘液を飲み込ませながら犯して来ました。



んんあああつ♡♡

触手は魔力を得た事でさらに活発になり、私の子宮を蹂躪し、快楽を叩きこんで来ます。私の体から魔力が失われていくと同時に、何度も繰り返し絶頂し、体を震わせました。



「イリヤ」「はあっ…♡はあっ…♡」

それから1時間ほど、私は触手にたつぷり犯され、触手は用が済んだとばかりに魔界へ帰りました。しかし子宮には、まだ大量の精液が残っており、その精液が私の魔力を吸い取り続けています。おそらく、成長のために使っているのでしょう。

「イリヤ」「まさこんな事になるなんて…♡」

私に出来る事は、失われる以上に魔力を補給し、触手の子を育てて産み落とす事だけです。私は城の外で、新たな相手を探し始めました。



【野良犬】
【イリヤ】

「ウウウツツツ！ワンツ！ワンツ！」「ひっ！きゃあああああっっ！！」

私が外に出てすぐ、盛りの付いた野良犬が襲い掛かって来ました。私には触手の体液が付いたままです。きつとその匂いで発情したのでしょう。

【野良犬】
【イリヤ】

「ハッ! ハッ!」
「んっ! ああっ♡」

私が両足を開くと、野良犬は躊躇なく勃起した。ペニスを私の割れ目にねじ込みます。触手の体液によって発情し、敏感になった体は、無意識にペニスを締め付け、声を上げました。

【野良犬】
【イリヤ】

「グルウウウツツ!!」
「ひぐっ♡ ひあああっ」

「ひぐっ♡ひあああっ♡♡」

【野良犬】
【イリヤ】

「あっ♡あっ♡」
「ウウウツツツ…」

「あっ♡あっ♡」

野良犬はその先端を子宮に潜り込ませ、私の最深部に直接射精を始めました。人間とは比較にならない大量の精液に、私の子宮はすぐに絶頂を迎えます。

元々、子宮に射精されるのが大好きなのですが、触手の精液で子宮内部が敏感になっっているためか、いつもより強い快楽で、頭が真っ白になります。私は絶頂し、野良犬の精液を絞りつくしました。



「イリヤ」『ラフツ♥じゃあ次は君だね♥』
「豚」『プギツッ! プギイイツッ!』

私は城から少し離れた場所にある養豚場へと移動し、そこで飼われている家畜の豚の所へと向かいました。豚は私を見るなり鼻息を荒くし、ペニスを勃起させます。私は膝を付き彼らに背を向けると、そのうちの1匹が私にのしかかり、細長いペニスをねじ込んで来ました。

「イリヤ」『んっ♥ ああああつつ♥♥♥』

太さでは物足りませんが、いきなり子宮に入り込み、敏感になつていゝ場所を突き刺すように蹂躪します。…これ、めっちゃくちや気持ち良すぎる。私はその細いペニスを締め付け、腰を振り、その異形の快楽を堪能しました。





その後、夜が明けるまで豚達と交尾を続けました。
しかし朝になれば人がやってくるかもしれない。
私は城へと帰り汁まみれの体を綺麗にし、
夜まで休む事にしました。

ははは

ははは

ヒキキ

「イリヤ」

「はあっ…♡はあっ…♡」

結構魔力が溜まったかな…」

夜まで寝ている間に、子宮内の様子に変化しました。
子宮に出された精液は、触手の子種によって分解され、
魔力となつて触手の子種へと吸収されていったようです。
粘度の高い液状だった触手の子種は、少し固まってきたのが、
粒々とした形状の物体が、子宮内で脈動している感触が伝わってきます。
そしてそれは、より多くの精液を、魔力を集めてくるよう、さらに私を発情させます。
私は次なる獲物を求めて、魔力探知を行い、魔力量の高いオスを探しました。



「イリヤ」 「お兄さんたち、こんばんはっ♡」

私が近くの海岸へと向かうと、そこには不良グループがたむろしていました。彼らは私を見て訝しんだ後、じろじろと私の顔と体を凝視し始めました。

「不良」 「なんだこのガキ？ 体操の練習なら昼にやれよ。今は大人の時間だ」

「不良」 「ん？ よく見ると乳首と割れ目が透けてるじゃねえか？」

「不良」 「ガキのくせに、妙にエロいなコイツ……」

ははは

ヒキキ

ははは

「不良」 「こんな時間にそんな恰好で外に出て、

悪い大人にレイプされても知らねえぞ？」

「イリヤ」 「クスクス……レイプですか？」

私もう何度もレイプされてるから、今更気にしませんよ♡」

私が挑発的な笑みと目線を向けながらそう言うと、不良は舌なめずりをしました。そしてそのまま不良は私を取り囲み、私を砂浜へと押し倒したのです。



ザッ

ザッ

「へへっ、そういう事かよ…変態のクソガキがよ。」

レイプされたくてそんな恰好でここに来たわけだな？
 だったらその望みを叶えてやるよッ！」

「ひっ……!! ああああっっっ♡♡♡」

不良は私の後ろから、バックでペニスを突っ込んで来ました。触手の体液がしみこんだ肌から発するフェロモンの影響か、不良は目を血走らせながら、腰を突き上げて来ます。ペニスが子宮にねじ込まれると、強い快楽と魔力がペニスを通して体に浸み込んで来る感触が伝わります。ただの人間のクセに思ったより気持ちよくて、私は思わず声を漏らしてしまいます。



「不良」

「うぐっ…こいつガキの癖になんてマシヨだった…」

が、我慢できねえっ…！中に出すぞっ！」

「イリヤ」

「あっ…！！んおおおおおつつっ♡♡♡♡」

不良は私のオマシコに我慢しきれず、中に射精しました。精液が子宮に染み込むと、今までの相手とは比較にならない、大量の魔力が注ぎ込まれている事が理解できます。触手の精液もその魔力を受け、粒状の塊が小刻みに震え、私の子宮に特異な感覚を与えて、絶頂へと導きます。私は絶頂に震え、艶めかしい声を上げながら、膣を痛いほどに締め付けて、不良の精液と魔力を根こそぎ絞りつくしていきました。



不良達は私を一通り輪姦した後、すつきりした顔をして
その場を立ち去ろうとしましたが、そんな都合の良い事を、
発情している今の私が許すはずありません。
私は魔術を使って彼らの行動の自由を奪い取った後、
スクール水着姿に着替える事で彼らをさらに興奮させ、
より多くの精液と魔力を搾り取るため、彼らを犯しました。

【不良】「ひっ……もう勘弁しつ……あああ……」
「イリヤ」「全く、この程度で情けないですね♡」

ほらほら、しっかりと勃起して下さいよっ♡」

最初のうちこそ余裕そうな顔をしていた不良達でしたが、
3回目、4回目になると、苦悶の表情を浮かべ始めました。
しかし、レイプ魔に遠慮する事はありません。
私は何度も彼らの上で腰を振り、彼らを犯し続けました。



「不良」「も、もう限界っ……やめっ……しぬっ……」
「イリヤ」「仕方ない……次の射精で最後にしてあげます♡」

これ以上やるとテクノブレイクで死ぬかもしれせん。
私は不良のペニスを子宮内にまで加えこみ、不良の尻穴を
愛撫して前立腺を刺激し、射精を促しました。

「不良」「ひっ！ぐああああっっっ！」
「イリヤ」「あっ……♡いっぱい出てるっ♡♡♡」

不良は悲鳴を上げ気を失いながら射精しました。
私は痙攣する不良の体の上にまたがりながら、彼の濃厚な
精液と魔力を、最後の一絞りまで吸い尽くしました。
そうして全ての不良が気絶するまで搾り取った直後、
子宮の中の触手の子種が、激しく震え始めたのです。



死屍累々としている不良の隣で、私は足を広げます。
直後、子宮の中から粒状の何かが押し出され、膣を
通って私の体の外へと排出されていきました。

「イリヤ」

「あつ♡触手の卵がつ♡」

思ったよりも小さい卵が複数個、男達の精液とともに、
膣口からあふれ出し、小さい水たまりを作って行きます。
その卵は、私の魔力はもちろん、獣達や男達の魔力も
吸っており、それが子宮から膣へと通り抜けるだけで、
痺れるような刺激が与えられます。

「イリヤ」

「あつ…♡いくつ…♡」

その強い刺激に私は絶頂し、膣口をだらしなく広げ、
体を震わせて甘い声を漏らし続けていました。



「イリヤ」

「はあっ…♡はあっ…♡」

これで子種は全部産み落としたかなっ…♡」

私は何度も絶頂しながら、触手の卵をすべて産み落としました。
私は呼吸を整えて、死屍累々と横たわる不良を後目に立ち上がります。
私は大幅に回復した魔力を使つて、男達に魔術を使用しました。
魔術を受けた男達は即座に自我を失い、まるでゾンビのように
ゆらりと立ち上がり、獣のようなうめき声を上げ始めました。

ヒキキ

はあっ
はあっ

「イリヤ」

「魔法少女である私としては、

貴方達のような変態レイプ魔を野放しにする事はできません♡
この私が責任を持つて、精液タンクとして飼つてあげます♡」

魔術によつて自我を奪われた不良は、私の命令に対してうなずいて反応します。
城に戻れば、彼らの精力を回復させる手段など、いくらでもあります。
私は城に戻つてからの楽しみを想像し、早くも興奮し始めていたのです。

- 発行 鎖の少女&女騎士の城
<http://knightmaster.kir.jp/>
- 責任者 ナイト
general@kagoya.net
- 作成 雪味あいりす&ナイト
- 日付 2023年08月13日
- 印刷 プリントプロ
- ※18歳未満の購読禁止
※無断転載禁止































